

特集：DAIpoを今こそ見つめ直す

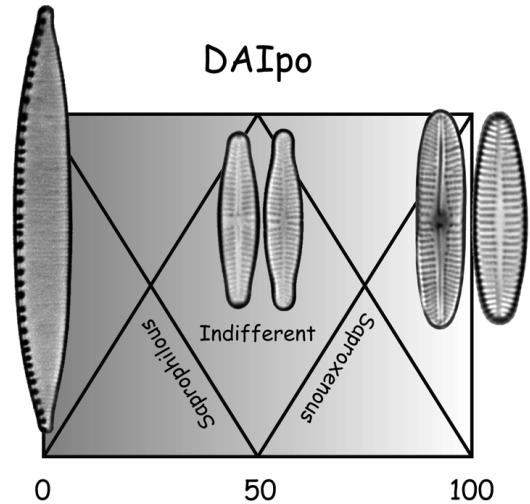
## 渡辺仁治名誉会長追悼記念特集 「DAIpoを今こそ見つめ直す」に向けて

日本珪藻学会会長 福嶋 悟

故・渡辺仁治名誉会長は、長年にわたる河川や湖沼の珪藻類の観察を基に、有機汚濁評価指数としてのDAIpo (Diatom Assemblage Index to organic water pollution; 付着珪藻群集に基づく有機汚濁指数) に関する多くの研究論文をまとめられた。また、淡水珪藻生態図鑑 (渡辺ら 2005) は、多くの種類を網羅した図鑑であると共に、汚濁指標性や生態に関する情報が網羅され、珪藻研究者だけでなく、多くの水環境に関わる業務に携わる者にとって、最も重要な文献のひとつとなっている。

DAIpo研究の基礎には、故・渡辺仁治名誉会長が長年にわたって積み重ねてきた、珪藻類を含む藻類群集の生態研究の豊富な経験と実績がある。それはまた、我が国における淡水藻類生態学の現在の課題を先取りしたのもでもあった。1965年に発表された「珪藻殻白帯」は、水位の低下した河川の景観を損なうものとして、現在でもダム下流河川で問題となっている。また、「藻類群集に及ぼす濁水の影響」に関する研究も、ダム湖に流入する濁質が下流河川の生態系、水利用、景観などに影響を及ぼすことから、対策が必要となっている。1980年代中途には「ダム建設にともなう珪藻群集の変化」で、物理的パラメータと珪藻の関係を究明し、濁水との関連づけを行った。これらの研究は、河川行政で対策が求められている現象に、40余年以前から取り組んでいたことを、改めて我々に認識させるものであり、その先見性と重要性の認識は卓越している。1980年以降にまとめられた「河川藻類群集の形成過程」に関する論文では、現場実験を研究に取り入れ、藻類の生活様式と遷移に視点を当てた。このような研究も、我が国の藻類の生態研究の道を照らすものとなっている。

日本珪藻学会の大会と研究集会では、故・渡辺仁治名誉会長は数多くの発表をされると共に、他の研究者の発表の質疑応答では質問と共に意見を述べられた。若き研究者にとって、質疑応答でのそのような経験は、研究の発展に良きアドバイスとなり、学会の発展にも寄与してきた。学会運営では初代編集委員長を務められ、Diatom第5巻まで



の編集を手掛けられ、学会創設期で財政的に厳しい中ご苦労された。その一例を挙げると、第2巻は報文16編で約200頁の会誌となって発行された。

日本珪藻学会では、故・渡辺仁治名誉会長の追悼のためにDiatom第25巻への投稿を呼びかけた。それに対して、ここに掲載した多くの報文が寄せられた。これは、故・渡辺仁治名誉会長の人望が厚かったことを示している。また今回掲載された報文には、DAIpoを算出したものが4編あり、他にも多くの報文中で故・渡辺仁治名誉会長らが明らかにした珪藻の水質指標性が考察の材料として用いられている。なお、投稿期間が短かったことで、投稿されたにもかかわらず25巻の掲載に間に合わなかった方々、および投稿を断念された多くの会員の方々には、ここに記してお詫び申し上げます。

本特集では加藤和弘氏、大塚泰介氏、辻彰洋氏が、他の多くの指数とは異なる種の序列化による指標性区分、指標する水質諸要因の検討、今後の環境指標と分類学との連携など、多様な視点からDAIpoを論議され、更なる検討課題も挙げられている。読者の興味を満足させるものと確信している。